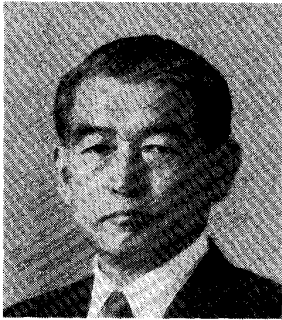


服 部 賞

川崎製鉄(株)代表取締役副社長
千葉製鉄所長

川 名 昌 志 君

製鋼技術の進歩発展と鉄鋼関連新技術の開発



君は昭和26年京都大学工学部冶金学科を卒業後、直ちに川崎製鉄(株)に入社し、49年千葉製鉄所製鋼部長、53年ツバロンプロジェクト協力本部主査(部長待遇)、54年同本部ピトリア室長、56年取締役千葉製鉄所副所長、59年常務取締役水島製鉄所副所長、61年千葉製鉄所長、62年専務取締役千

葉製鉄所長を歴任、平成元年6月代表取締役副社長に就任し現在に至っている。

君はこの間以下のような顕著な業績をあげた。

1. 製鋼技術の進歩発展

まず、平炉操業において大量酸素使用による高生産性製鋼法を確立し世界最高の生産能率を達成した。転炉に関しては、昭和34年から、150トンLD転炉の建設に参画し、さらに同転炉の操業に関わり、単一の転炉製鋼工場としては世界最高の生産能率を達成し、41年度の大河内記念生産賞を受賞した。昭和40年水島製鉄所製鋼部へ転任後は同所第1製鋼(180トン/回)、第2製鋼(250トン/回)の大型LD転炉工場の建設に参画しこれを完成させた。

昭和52年には千葉製鉄所第3製鋼工場に底吹き大型転炉(230トン/回)を導入し、その操業技術の確立に貢献した。特に炉底耐火物寿命の延長に代表される技術開発により底吹き転炉の生産性と製鋼コストを上吹き転炉に優る地位に向上させるとともに、上底吹き転炉技術発展の契機をつくった。この技術についても55年度の大河内記念生産賞を受けた。

2. 鉄鋼関連新技術の開発

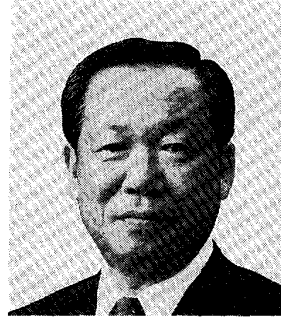
鉄鋼製品製造技術の面では、鑄込み圧延クラッド鋼製造技術を開発した。従来法と違って、鋼片を異なった種類の溶鋼で鑄ぐるみ、分塊および熱間圧延時に界面を圧着させる方法を開発し、クラッド鋼の生産性改善と製造コスト低減に大きく寄与した。この技術は、62年度大河内記念生産賞を受賞している。

また、省エネルギー技術の開発にも深い関心を抱き、数々の鋼種の連続鑄造技術の開発、確立と連鑄比率の向上等の技術開発のみならず、製鉄所の低カロリー副生ガスの利用効率の向上技術として、高効率大容量のガスタービンコンバインド発電システムの実用化に成功した。このシステムは低質、低カロリーの副生ガスの高温安定燃焼技術の開発により天然ガス焚きのガスタービンに劣らぬ高効率(46%以上)を達成したもので、63年度の岩谷直治記念賞を受賞した。

服 部 賞

前新日本製鐵(株)常任顧問
太平工業(株)代表取締役社長
山 田 龍 男 君

鉄鋼生産技術の進歩発展、特に製鉄技術への貢献



君は昭和26年3月東京大学第二工学部冶金学科を卒業後直ちに富士製鉄(株)に入社、室蘭製鉄所製鉄部製鉄課長、本社生産管理部生産課長、室蘭製鉄所生産管理部副所長を経て45年新日本製鉄(株)発足後、室蘭製鉄所製鉄部長、生産管理部長、副所長を歴任した。昭和56年に取締役に就任し、中央研究本部

の研究企画を管掌、58年常務取締役名古屋製鉄所長、62年取締役副社長に就任しエンジニアリング事業本部長およびライフサービス事業を担当し、平成元年6月常任顧問を委嘱され現在に至っている。

その間君のあげた業績の主なものはおおむね次のとおりである。

1. 製鉄技術の進歩発展

君は、長年にわたって製鉄部門の設備操業と技術開発に携わり、生産性向上の為の種々の設備技術・操業技術を開発した。室蘭製鉄所において昭和34年当時熱風炉自動切替装置、熱風炉ライン型ギッター炉、高炉巻上げ自動制御システムを国内で初めて開発しその後の高炉の設備技術操業技術をリードした。またこの当時国内はもとより西側世界最大の大型高炉である室蘭第4高炉の建設に参画し、高炉の大型化の先鞭をつけた。更に日本初の3ベル式高圧高炉の導入にも成功し、新しい高炉の姿を提示した。その操業解析論文はAISE-Kelly賞を受賞して世界の注目を浴び、更にこの3ベル式を一段と改善した2ベル1バルブシール方式の高炉炉頂装入装置を開発して大河内記念技術賞、日本機械学会技術賞の各賞を受けるなど炉頂装入装置およびその関連の設備操業技術開発は学術、技術上極めて画期的な業績であった。これらの成果は室蘭製鉄所における超高压高炉操業、炉底盤水冷却、高炉ステープ蒸発冷却技術等に結実し、これらの技術は広くその後の日本の製鉄技術の発展に貢献した。君はまた室蘭製鉄所副所長としても、また更に取締役として本社に転じてからも、高炉操業の近代化、新しい製鉄法の開発等に幅広い経験と深い洞察力からの的確な助言を行い、製鉄技術の進歩発展に多大の貢献をした。

2. 新製品開発等

君は、名古屋製鉄所長として、消費地立地の製鉄所の特質を活かした商品競争力の強化、新製品開発を指導して自動車用防錆鋼板、高級電縫油井管、極厚圧延鋼板等の多品種にわたる研究開発と商品化を推進し、多様化・高級化する市場のニーズに的確に応えた。昭和56年中央研究本部発足時に副本部長として総合素材メーカーを目指す研究開発力の強化および未来事業探索研究の展開をねらった研究開発体制の基礎をつくった。またエンジニアリング事業本部長として、建築・都市開発事業や土木関連分野において内需関連大型プロジェクトを中心に重点的な活動を展開し成果を上げるとともに、海外では米国におけるインランドスチール社との合併による冷延連続焼鈍処理設備の建設を開始し、またインドのバンプール製鉄所の近代化に貢献した。